

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本語における女性語
Author(s)	ヤスパールツ ヒレート,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1989 : 113 - 118
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039271
Right	
Relation	



日本語における女性語

ヤスパー・ルツ・セレート

①ある社会の構造がどのコミュニティに使われている言語にどのような反映されているかという研究が社会言語学の中心になってきているか。その中の男女差はついで少し考えてみたいと思う。

②世界のいろいろな言葉に歴史的に成長した性別が程度を変えて現われている。皮相な見方をすると、一般に英語には男性と女性が使っている言語が全く同じではないかと思われられているかもしれないが、そんなに単純ではない。英語よりむしろ表面にその差が明らかになっている日本語の男/女性語は大変微妙な問題であると思う。

言語学者の意見ではなく、一般普通の方にインタビューしてみた。

「私はねー、あのう、公衆語には区別はないと思う。とれど、あのう、公衆語じゃなくて、私的な会話の中では男性語と女性語はまだ日本では区別がある」(羽尾のりこさん・45才)

この日本語における女性語は主として「敬語」「終助詞」「人称代名詞」などにみられる女性が使った言語表現に表われている。後で例をあげます。

③ 男女差の歴史的な背景

A. インタビュー

「まんより時代はねーと、となつたと思うわねー。音が全然違つてしょ。はるがはるだし、ちょっと今の朝鮮の言葉とすくなくって、このねー。ふけ社会の中で、あのう、音、はる、女性の方がたいとう

- 女性かたいようでという時代があ。たんじゃなり〜 男性のあかに
 びるようにね、てきた〜 だんだん権力を持、てきたんでしょ〜 文
 化のせんれんが盛まてきた〜 (羽根のりこさん - 45才) 一般の人
 はこのテー マを研究しなくとも 女となく 男女差が歴史的にどんたふ
 うに変化してきたか 理解して いるらしい。

5. 歴史考察

中世以前にはほとんど観察されていなり 男女差は室町時代から明確
 な形で出現した。いわゆる「女房語」が文化の中心であった京 都宮廷
 に働いて いる貴族階級の女性によ、て作り出された。元は女房の間か
 りの隠語で 婉曲さや丁寧さを表す ことが多かったらしい。その上品な
 敬語表現の 使用範囲が段々広がったのである。

文化の中心が江戸に移、て「山の手ことば」の母体となる江戸語が形
 成された。その「山の手ことば」が明治時代になると標準語として選
 ばれ、同時に女性語が全国に普及した。これで女性語と日本語の男女
 差ははじめからなかったということは分かってきた。

現代の事情を 観察するために20年前から今までの女性語を 観察し、ど
 のような形 で存在しているか、又どのように変化しているかを考
 へてみることにする。

④ 女性語とは

A. 一般に

一般に、今の女性語は全体的に丁寧(politeness)であると思、う。日本
 だけではなく、世界のどこでも主ち人とした、いわゆる標準語に近い
 話し方を するのが女性です。大体子供の教育に男性よりも大事な後割
 を持、ていて、母又教育者としての立場から 主れの女主を 使わねけ
 るがゆ、けなると広く思、われている。

「一つの社会現象としての言語は、社会的な態度と密接に関係しているからと、性別による言語が生ずるのだ。」

社会は男と女にそれぞれ異なる社会的な役割を課し、それぞれ異なる行動のパターンを期待するという点で、男と女は社会的に異なる。言語の方はこの社会的な事実を反映させているにすぎない。男女のことは、上に示したように、互いに異なるというだけではない。女のことばは男よりむしろ(社会的に)「より良い」(better)のである。——」

「言語と社会」p.105 P.トラッド著、1974

この「better」が日本語でやめらる。直接的ではない。いわゆる女らしい言葉をあがわしていると思う。一般に思われているより、話し手か選んた口に出すことにより、その人を判断したり、自分でも判断されたりしているようである。日本人にと、ては、この選択がとても大事で、言語面からみると社会的慣習に従った。敬語である。

3. 敬語理論

使用面にかいては、話し手が言語使用をおこなう際の対人関係行動の種類により、二つの側面がある。一つは「おまじえ」(discrepancy) もう一つは「働きかけ」(action)による使用である。前者は対人関係や場面に応じた社会のまじえに従うために使われる受動的な敬語。後者は、話し手の意図による、それぞれの発話効果をわかった、相手に積極的に「働きかける」敬語使用である。(井出希子 1987)

この二つのストラテジーを名付けたのはヒル(Hill et al. 1986)です。現代の敬語理論のフレームに入れてみたのは井出先生です。段米ではITコフ・ブラウン、レビンソンなどが丁寧さに関する言語使用の理

論を出している。興味深い論文を出版している。(日本と欧米の包括へ—という記事には敬語理論の普遍化を評化して、日本語又日本の社会にあわせて見直されている。、How and why do Japanese women speak more politely in Japanese 女性達の使っている敬語をアウレンとシビレソンの肯定的丁寧行為/否定的丁寧行為メゴッフソンの deference と demeanor という用語を基にして分析している。)

「POLITENESS」が一般^般的^的にどのようなふう^にに致され^ているか^がまず^に調べてみ^{よう}。話し手が相手に対する言語使用: 処分に話せる距離を設定し、相手の気持を大事にするつもり^でいる^{という}メッセージ^が入^っている。多^くで^話し^敬語^に日^本語^にあ^りて^る女^性語^の特^長か^とな^より^に含^まれ^てい^るか^の例^を少^しあ^げて^みよう。

C. インタビューから見て、女性語の特長。

1. 「どうだわねー」(中野ミツカ 21才)
「ど」「せ」「な」は男性有^であ^って、女性^は終^閉詞^として^もと^とや^わら^かく^て、間^接的^な表^現を^好む。女性^が多^く用^いる^子も^の「わ」「のよ」「か^らじ」には「よくあ^らな^りです^けど」とい^う嬌^若し^てい^る意^味が^入り^てい^るよ^うだ。

2. 「おはようですわね。」(塚田×エコ 46才)
さ^っす^の終^閉詞^の例^(わね)に^もな^るが^普通^の「は^やい」に^あら^じけ^て、も^っと^優雅^な表^現に^する^ため^に使^用さ^れて^いる^もの^であ^る。あ^の付^く話^と付^かな^り話^も母^国語^話者^には^結構^は、き^りし^てい^るが、段^々あ^の起^る頻^度が^大き^くな^らな^りす^る。全^く相^心し^くな^感じ^がす^るこ^とが^ある。例^えば、あ^の外^来語^(お^ラッオ、お^タシス)が^ある。こ^れも^やは^相対^的に^女性^が多^く用^いる。

3. 「^{わたくし}私なんが...おたくがとうおしやっ たんではなひですか」
 人称代名詞は、場面や話し手と相手との親疎・上下関係にしたが、
 て選択されるか。一般に女性^は男性より丁寧な人称代名詞に近いのは
 呼称である。フォーマルではない形(例之は呼び捨て)が女性に
 まり用いられていなり。けれども、最近遠うことが目立ってきた。男
 性用といわれてい子二人称の「おまゝ」が段々聞かぬくなくて
 いる。この差が少なくなるといふことは後で、来ることにする。

1. 2. 3. 衣外にも女性語男性語それぞれに特有なものがある。けれども
 すべてこの短い論文で扱うわけにはいかない。データを集めたから
 つも出て来るのは音韻に関するもの。声の高と、男性より誇張し
 イントネーションなどや、言い回しに表現が多いなどであった。

⑤ 女性化/男性化 ?
 インタービューされた女性達はそれぞれ男っぽく話す女性をきか
 けた「気持ち悪い」「はづかしい」「信じられぬ」といふ言い方で
 表わしていた。「今の小中学生のひどい言葉」を決して口にしぬい
 たい切っていた。逆に少しの^が女性語とみられることばを男性が使う
 が「かわいじやない」「まかゆるされる」と言っていた。自分の性加
 格に期待されている通りの行為をしなう場合、大変きびしく判断
 される。これをどうやって解釈すればよいのだろうか。

⑥ けつろん
 この問題かけではなく、もう一つあげてみたいと思う。無意識に自
 分の語彙選択で言葉にたまさかしている気かしらことあるのではな
 いだろう。そういうことは非常に大事にしなけれはぬらと思う。なせ
 らば、まわりをうやうやしく、自分でもうやうやしくされてい
 るからである。

(6)
女性がこれからと意識的に言語の使用が「よわい人種」とみられるのが少なくなるのではないか。

今まで話しをもた男女差が将来どうになるかという点とは誰も分らないけれども、今日の状態を見る限りお互いお近づいて、中立的になるのではないのかと思う。

おわりに

この論文は新しい。おわめて重大な理論ではなく、ただ言語学者のぬい私には女性と男性の違う言語使用に興味を持っていて、一年間広島大学で読んでおいた本、又集めておいたデータの纏めである。

参考書

1. 「言語と社会」 P. トラ フォックス p. 93-114. 1974
岩波新書
2. 「How to be polite in Japanese」 日本語の敬語
OSAMU + NOBUKO MIZUTANI. 1987
The Japan Times
3. 「女性語」 寿岳章子.
岩波新書
4. 「Language and Women's Place」 R. レイコフ. 1975
5. 「How and why do women speak more politely in Japanese?」
丹出祥子. 1986